
キャンパスライフ

トラキチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャンパスライフ

【Nコード】

N5488A

【作者名】

トラキチ

【あらすじ】

京都を舞台とした青春恋愛小説です。胸をときめかせて大学生を送る若者達の成長をほろずっぱく描きたいと思っております。

第1話

2002年6月下旬、本間直斗はもうすぐ20歳の誕生日を迎えようとしていた。

夢にまで見ていた大学生活も、蓋を開けてみるとすぐにいわゆる5月病が発症。

なぜなら、大学生になったら“必ず彼女を作ろう”という意気込みも空回りしつつあるからだ。

2月に合格の栄冠を勝ち取って以来、“必ず彼女を連れてキャンパス内を闊歩して歩きたい”と信じて鹿児島からここ京都・北大路にあるワンルームに越してきたのであるが・・・

もうすぐ夏休みが始まる。

“それまでには必ず！”と焦りが日増しにヒートアップしてきたのである。

思えば去年の今頃は予備校通い、今日の日を信じて禁欲生活を送っていたのであるが、直斗にとって受験勉強以上にキャンパスライフは厳しいものとなっているのである。

もちろん、直斗なりに入学以来いろんな努力をしてきた。

“カムツゲザー”という名のテニス同好会というサークルに入り、週2回はラケットを手にして来た。

直斗の大学は共学であるが、近くの短大や女子大の子も参加しているので男女比率は4対6。

4月の入会時には正直“選び放題”だなという多少余裕を持っていた自分が今では嘘のようである。

決して外見的には他人より見劣っているわけではない。

九州男児のイメージ通りの掘りの深い顔をしている。ただ、大きな欠点はやはりテニスが下手であると言っ点である。だから最近ではあんまり同好会には顔を出さない。むしろいつやめても構わないと思っている。

そこで直斗は経済学部の同じゼミ仲間の紹介で合コンに1ヶ月ぐらい前から精を出しているのである。いわゆる方向転換っていうやつだ。

昨日まで計3回コンパを実施した。

5月の末にH女学院、6月中旬にD女子大、そして昨日（6月25日）にK女子大。

1回1回の開催の間隔が縮まっているのは直斗の焦りを如実に表しているのである。

直斗のコンパ仲間合計5人、名古屋出身の拓哉、地元京都の将年、岡山出身の浩介、高知出身の伸浩との5人である。

2回目までのコンパで拓弥と将年が彼女をゲット、直斗と浩介そして伸浩の3人は依然としてやもめ暮らしである。

前2回のコンパでは気に入った子がいたのであるが、拓弥や将年に先を越されて声をかけられていた。

「大学生活ってこんなはずじゃなかったのに！」と2回目までの教訓を踏まえ、なけなしの勇氣を持って自らを奮い立たせ、昨晚K女子大の雪絵と京都の待ち合わせのメッカ、四条河原町の阪急前で会う約束を交わしたのである・・・

第2話

「どうしようかな？」と中森雪絵はひとりごちた。

ここは中京区の烏丸御池にあるワンルームマンション。

福岡から親元を離れひとり暮らしを始めて3カ月が過ぎようとしていた。

本当は東京の大学に行きたかったのであるが、親の希望で京都の大学に落ち着いた。

京都だと親も安心感が漂うらしい。

K女子大に入学してからはひとり暮らしの寂しさをまぎらわすために、一日も早く彼氏を作ろうと努力している。

K大学のテニス同好会に所属しているが、野暮ったい男が多すぎて最近はあるまり顔を出さなくなった。

そこで同好会仲間のさくら、月子、加代、美穂との5人でコンパに明け暮れている。

雪絵の悩みの種は、コンパをする度に1番カッコいいと思っている男からお誘いの言葉を受けないことであった。

「私は不幸の星に生まれてきたのだわ」そう思うことがしばしばある。

思えば高校時代も恋愛には恵まれなかった。

と言うのは、いつも思いを寄せる男との恋は成就せずに来たからだ。恋愛に妥協はしたくない。

高校生時代からのモットーなのであるが・・・

昨晚のR大とのコンパ。

なかなかいい男が2人いたのである。

自己紹介の時に「キムタクじゃなくナカタクです」とおどけてみせた長髪の中村拓哉。

あと、髪はスポーツ刈りであるが精悍なまなざしが印象的な岡谷将年。

本人いわく、「最近ふられちゃったので髪の毛バツサリしました」と言っていたが真偽のほどはわからない。

1次会の祇園の店を出たのが夜の8時半。

2次会は三条京阪近くのカフェ。

普通、カラオケぐらい連れて行ってくれないのにも思いつつも結構話がはずんだ。

ここで拓哉が将年どちらかから声をかけられたら、私の大学生活もバラ色なのと思っていた矢先、少しおとなしめの本間直斗という鹿児島出身の男からほとんど唐突に「携帯番号を教えてください。」と言われ断りきれずに教えてしまった。

彼との会話で覚えているのは「僕も九州出身です」、「僕もテニスするんですよ」、「女優の仲間由紀恵に似ていますね」ぐらいしかない。

帰宅後、すぐに直斗から電話がある。

酔った勢いもあったのであろう。すぐにデートの約束をOKしてしまった。

直斗のことは正直なんとも思っていない。

とはいえ、無意識に着ていく服を自然と探しているのはやはり恋多き年頃の証拠なのであろうか？

男にちやほやされるのは嫌な気分ではない。

「とりあえず行って見るか」と決心を固めた。

青のボーダータンクトップと白のジャージーラップ風スカートに身

をまとい、6時前にマンションを出て御池駅より地下鉄烏丸線に飛び乗る。

南へひと駅、四条で降りる。ここは烏丸通り京都の南北を走るメインストリートである。

約束の四条河原町の高島屋は同じ四条でも河原町通り沿い。

阪急に乗り換えてひと駅なのであるが、まだ時間もあるし歩いて行くこととする。

今年の梅雨は空梅雨である。

今日も真夏を思わせるような暑さだったのであるが、さすがに6時を過ぎると過しやすくなった。

京都の町は若者の街だ。

身を寄せながら歩くアベックを羨ましく思いながら大丸前を通り過ぎる。

すると河原町方面から見知った顔がこちらに向かって歩いてくるのに驚いた。

そう、昨晚コンパに参加していたR大の将年である。

雪絵は入試の合格発表を見る瞬間以上に自分の心臓が高鳴っているのを感じずにはられない……

第3話

岡谷将年はいらいらしながら河原町通りを歩いていた。

昨晚のコンパで知り合った坂上美穂と京都府立植物園にて初デート。“植物園でデートするカップルは別れる”という言い伝えを破ろうと意気込んだあまり、暑さと前の彼女とのいきさつで焦りがピークに達し破天荒な行動に出ってしまった。

なんと、ベンチで半ば無理やりキスをしようとして、美穂に頼つぺたを殴られて帰られてしまったのである。

よく考えれば、まだ付き合ってもないのに別れるなんておかしいなと思うがそこは後悔先に立たずである。

こうなればヤケクソモード全開ということで四条河原町までひとり車で虚しく戻り、新京極のパチンコ店で1万円すられ、コンパ仲間の中村拓弥から伝授してもらっているナンパを敢行しようと考えながら四条通りを烏丸方面に歩いていった。

思えば少し大胆な作戦に出すぎたのかもしれない。

実は3日前に先月のH女学院とのコンパで知り合った宮村小百合と別れた。

別れたと言えば聞こえが良いが、振られた。

『もう将年君とは会いたくない』というメールが入って来た時はショックで思わず少しボサボサだった頭をスポーツ狩りに刈った。

しかし切り替えの早さとプラス思考は誰にも負けない。スポーツ刈りにしたことと爽やかさが増したと信じ込んでいる。本人は昨晚のコンパに備えたつもりである。

コンパの席で女と別れたから髪を切ったと伝えたのであるがはたして信じて貰えたのであろうか？

話題が豊富なのは女性にモデル大きな武器である。

コンパ仲間5人の中で唯一地元出身と言う地の利を見せ付けたいと、いつもコンパ開催の時は話をはずませる。

天性の口の巧さで、簡単に女性は落ちると思いがちだが、肝心なところで焦りが生じてしまい、どちらかといえば詰め甘いタイプであると自分自身では認識しているのだがまわりはどう思っているのだろうか？

それにしても昨日のコンパは可愛い子が多かった。

実際、どの子に声をかけようか大いに迷ったのも紛れもない事実である。

日本の美人の美穂、ボーイッシュさが魅力の月子、小柄ながら長い髪が魅力的なさくら、少し控えめなところがかわいい加代、そして終始1次会の時に話をしていたイマドキの雪絵。

その場の展開から雪絵と仲良くなるのが自然な流れだったのだが、2次会のカフェで突如奥手で通っている直斗が雪絵と話し出したので遠慮した。

直斗が「仲間由紀恵に似てるね」と言っていたのも言い過ぎではない。

その切り替えがきくときかない時の差が激しいのが将年の特徴でもあるのであるが、今は自暴自棄気味になっていた。

というのは小百合と付き合いだして1カ月、手もつななかったのである。

それが嫌になられた原因ではないのであろうかと後悔することしきり。

仲間の中で唯一自動車を持っている将年は京都では珍しくマツダの車に乗っている。

帰りの京阪電車で一緒に帰った広島出身の美穂とマツダの車の件で盛り上がり、今日の府立植物園デートを約束したのだ。

ナンパを試みようとする女の子を物色しながら歩いていると、なんと自分の中では本命だった雪絵が向こうから素敵なファッションに身を纏い歩いてくるではないか。

「もしかして雪絵ちゃん？」さして親しくない女性に対してさりげなく呼ぶのは得意だ。

「あつ、こんにちは」と雪絵が答える。

「ひとりなの？」

「はい」

「これから予定ないの？」

「はい、ひとりでぶらぶらしてるだけです」

「よければ、晩飯でも食べに行かへん？」

「いいですよ」

将年がUターンをし、河原町方面に2人で歩いて行く。

一方の雪絵は途中、四条寺町を左折し寺町通り方面に進んだとき、胸をなでおろすことを忘れなかった。

なぜなら直斗と待ち合わせしている阪急前まであと100メートル足らずのところだったからだ。

開き直った時の将年には神様と言う大きな味方がいるのであろうか。

第4話

宮崎月子は坂上美穂からの電話を受け植物園デートのあらましを聞いて開いた口が塞がらなかった。

実は午前中、美穂から相談の電話があったのだ。

昨晚のコンパの帰り、突然将年から誘われたらしい。

何事にも慎重な美穂に迷った挙句、“石橋を叩いて渡る人生って面白くないよね。行つてらっしゃい”とうアドバイスをしてしまったのである。

5人のコンパ仲間の中で現在彼氏に近い存在がいるのは月子だけである。

厳密に言えば、まだつき合っている段階ではないのであるが。

ショートカットにジーンズ姿がよく似合う月子は東京出身である。

テニス同好会だけでなく演劇サークルにも所属している。

どちらかと言えば演劇のほう彼女の性に合っているのであるが。

月子に猛然とアタックしてくる男性が現われたのは約1カ月前。

大阪出身の兼田俊彦というE大生である。

同じ高校でE大に進学した加納弥生の紹介で知り合つて2人で会うようになった。

実は月子は先日俊彦と植物園に行ってきたばかりであった。

俊彦は演劇の製作担当である。

本人いわく、「俺は三枚目だから役者は無理だよ」と言っているのであるが、半分当たっているのでも返答に困る。

他にも小説を読んだり書いたりするのが趣味のようだ。

中でも芥川賞作家の川上弘美さんが昨年上梓した『センセイの鞆』という作品がお気に入りなので、「作中のヒロインのツキコが月子ちゃんにそっくりなんだよ」と会うたびに話題にする。

本をプレゼントされたので読んでみると、かなり私のことを美化してるんだなと思ったりするのだけど、男の人って結構単純なのかな。

大学生になったら念願だった外国ひとり旅を必ず敢行しようと思っているのであるが、この調子だと俊彦に心配されたらどうしようかなと不安な面もある。

彼は本当に私に優しいだけに、昨晚のコンパでも人数あわせ的な役割に徹したつもりではあるが・・・

美穂との長電話が終わり申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

リラックスさせるつもりで言った言葉が大事に至ってしまった。

そこで人生に気分転換は必要であるということと四条河原町に出ようと決める。

目的は演劇関係の本を見るため。

右京区西院のワンルームを出たのが5時ちょっと前。

もちろんジーンズにポロシャツという定番のファッションである、あと薄化粧なのも月子の特徴だ。

ジユンク堂でかなり長時間演劇関係の本を立ち読みした。

時計を見ると6時20分。

レジにて文庫新刊1冊を買い、阪急に乗って帰ろうと思いい店を出る。明日は1講目から授業だ。

すると美穂から聞いた昼間の話の時以上に開いた口が塞がらない事態が目の前で展開されていた。

なんと20メートルほど先を将年と雪絵が寄り添って歩いているの

である。

まるで恋人同志の如く・・・

月子は雪絵より美穂の方が親密である。

持ち前の江戸っ子の気風の良さで“どう言っことなの！”と問い詰めようかと思案したが、2人は寺町通りを左折したのでなんとか唇をかみ締める。

イライラしながら阪急前までたどりつくともた見知った顔に出くわす。

確か直斗くんだったっけ・・・昨晚のコンパの男性メンバーのひとりだ。

やけにそわそわした素振りが目立つのと、コンパでほとんど話さなかったので無視して阪急電車乗り場に向かう。

どちらかと言えば恋愛には疎い方であると思う。

恋愛に生きるより自由奔放に生きたい性分だ。

これ以上、美穂を傷つけない。

とりあえず美穂には黙っておこうと決心する。

自分はいつも一生懸命生きているつもりだ。

でも恋に夢中になったことがない。

このあいだ俊彦に会った時“月子ちゃんって人生を達観してるね。”

”と言われた。

それって褒め言葉なのだろうか？

バスに浸かりながら「将年さんの行動って結構、男の人の単純さが露呈されたのかな？」と自問するが答えが出ない。

月子は“自分自身より周りの人間の方が青春しているのではないか

”？”と自信が揺らいで行くのであった。
>

第5話

四条河原町阪急前、恋人達が次々と出会い去って行くのを尻目に、待ちくたびれた直斗のイライラは頂点に達していた。

“ You don't have to worry, worry .
守ってあげたい！あなたを苦しめるすべてのことから！”（『守ってあげたい』から引用）

昨晚寝る前にユーミンの懐かしいラブソングを聴いて熱くなった自分が嘘のようだ。

約束の6時半を1時間過ぎ、時計の針は午後7時35分を指している。

1年でもっとも日の長い時期であるが、さすがに暗くなった。

始めは、携帯が鳴らないか気になっていたが、電波がいつ確認しても3本立っていてなおかつ着信音が鳴らなかった。

時間を彼女が聞き間違えたのではなかるうかと、雪絵に直接電話しようかと思ったりもしたが、もし緊急事態が起こったりした場合気の毒だなと思ひ差し控えた。

「ああ、虚しいな・・・」とつぶやき阪急前を離れる決心をする。さすがにまつすぐ帰る気がせず、餃子の王将で大好物の餃子を5人前ほど焼け食いしようかなと思ひ河原町通りを北上する。

道行く一人歩きの若い女の子が全て雪絵に似ているように見えた。

ちょうどその頃、阪急前から100メートル離れた河原町通り沿いのパチンコホールでコンパ仲間の中岡伸浩と羽田浩介はCR海物語に自分達の青春をぶつけていた。

2人のあいだには2歳の年齢差がある。伸浩が二浪で入学したためだ。

少し寡黙な伸浩と甘えん坊タイプの浩介はとつても仲がよくまるで兄弟のようだ。

“類は友を呼ぶ”という言葉どおり、無類のギャンブル好きで、いつも友人に代返を頼んでパチンコホールに入り浸っている。

パチンコで負けた分をせっせとバイトで稼いでいるのが現状であるが、人生に授業料は必要なであろう。

2人の共通点はギャンブルには積極的というか依存的であるが、恋愛には消極的である。

昨晚のコンパにおいても伸浩は加代、浩介はさくらを気に入ったのであるが何のアプローチもせずにいる。

『どうせ、俺達と直斗はいつまでたつても彼女出来ないよな』と自分達をなくさめている。

今日のパチンコの調子は最初は2人とも好調だったのだが、確変が続かずに長期スランプに突入、これじゃ勝って“木屋町のセクキヤバへ!”の合言葉を達成できそうにないムードが漂いはじめていた。共倒れ寸前、パチンコは財布の中身が少なくなればなるほど熱くなるのは言うまでもない。

直斗が青ざめた顔でホールに入ってきたのは浩介が激熱リーチに入した時、午後8時半過ぎであった。

餃子臭くって酔っ払っているのだが、顔が青ざめていていつもの直斗らしくない。

伸浩が「どうしたん、直斗?」と聞いても直斗は無言であった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5488a/>

キャンパスライフ

2010年10月9日03時56分発行